



静脩

1992年 9 月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 29, No. 2

チベット大蔵経

文学部教授 御牧克己

京都大学附属図書館に所蔵されているナルタン版チベット大蔵経を一昨年以來学生さん達に手伝ってもらって整理し始めたが、それも一段落し、電算機入力も完了した。また、本年6月16日に同図書館で開催された「近畿地区国公立大学図書館協議会総会」に於てその成果の一部をご披露する機会も与えられた。同主題については専門家を対象として以前に草する機会があったので、ここではむしろ専門家以外の人にもチベット大蔵経とはどういうものか、そのアウトラインを知って頂くために覚書程度のものを残しておきたい。

我が国でチベットと云うと電気すら通っていない山奥の辺鄙な未開地といった語感が強く、京都府下へ引っ越した友人から「ついに日本のチベットへ引っ越すことになった」というような案内状を受け取って、チベット最良の私は腹を立てたりする。確かに地理的・物理的には不便で未開の面が多いかも知れないが、文化的な面では、瞑想時の心の分析など、精神的な面を描写する用語は実に豊富で、日本語と外国語とを問わず近代語に翻訳する際には対応する訳語の貧困を痛感させられる。チベット大蔵経の存在も過去の文化の高さを示す好例と言えるだろう。チベットへ仏教が入るのは我が国に比べて約一世紀程遅れた7世紀頃であるが、自国の言葉に翻訳された大蔵経というも

のをついに持たなかった我が国に比べてチベットは自分達の言葉に訳された大蔵経を、しかも幾種類も編纂した。文化的に低いなどとはとても云えないのである。

チベット大蔵経は、上にナルタン版チベット大蔵経と云ったように、頭に版本の名前を冠することが普通である。ナルタン版以外によく知られるものでは、北京版、チョネ版、デルゲ版などがある。これらは17、18世紀に開版される四大チベット大蔵経として名高く、ナルタン等は全て大蔵経が印刻された地名を示している。

チベット人は大蔵経を分類する際に、漢訳大蔵経のように三蔵（経・律・論）という分類を採用せず、カンギュル（「仏説の翻訳の意」）・テンギュル（「論書の翻訳の意」）という分類を採用し、前者には經典そのもの、後者には注釈・論書を収めている。

チベット仏教史を大きく分けるモメントは10世紀を境とする仏教前期伝播期と後期伝播期という概念である。前期伝播期から仏典の翻訳は盛んに行われており、『翻訳名義大集』（814年頃）といった仏典翻訳のためのサンスクリット・チベット語語彙集や『デンカルマ目録』（824年頃）といった翻訳仏典目録等、後のチベット大蔵経の先駆けとなる動きは既に前期伝播期に存在したと言える。

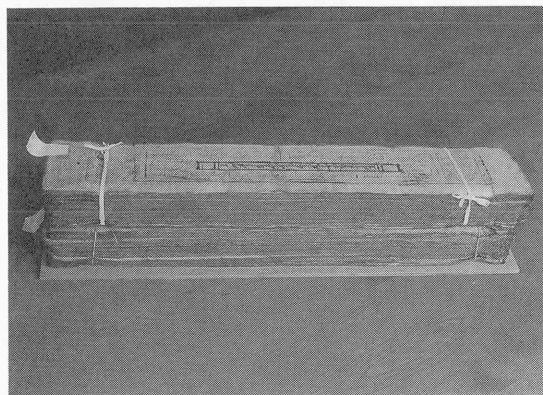
しかし、チベット大蔵経が現在我々が見るのに近い形で編纂されるには、後期伝播期に入って既に2、3世紀を経た14世紀初めの所謂「旧ナルタン大蔵経」の確立まで待たねばならない。

それには当時のナルタン寺のチョンデンリクレル、ジャンペーヤン、ウパロサルという三人の僧に負うところが大きい。とりわけジ°の果たした役割は顕著である。三人は師弟関係にあった。ジ°はチ°の弟子であり、ウ°の先生であった。ウ°はまたチ°の弟子でもあった。ジ°はある月夜にふざけて悪魔のお面を被り先生チ°を驚かせようとしたところ、先生は本物の悪魔が出たと思い、ナルタン寺中を逃げ回るに至る。事の真相が発覚した時、チ°は烈火の如くに怒り、為にジ°はナルタン寺に居れず、サキャ寺に移らざるを得なくなった。しかし徳が高かったとみえて、元朝第四代仁宗ブヤントウカン(普願篤汗：在位1311-1320)の招きを受けてそのラマとなって元朝の宮廷に迎えられる。そしてそこから師のチ°に支那墨・筆写具一式を始めとする贈り物を贈って和解を求める一方、弟子のウ°にも同様のものを贈ってナルタン寺に大蔵経を確立するように指示した。ウ°はもともとナルタン寺にあったものに加えて諸方からオリジナルやコピーを蒐集し、ナルタン寺の文殊堂に安置した。これが「古ナルタン大蔵経」である。版本ではなく、写本であったことに注意する必要がある。この大蔵経は残念ながら散逸して現在伝わらないがその後に作成される諸々のチベット大蔵経の基になる点で大変重要である。

最初の版本による大蔵経は、明の永楽帝により1410年に開版(永楽版)され、次いで万暦帝によって1605年に覆刻される(万暦版)。チベットに於ける最初の版本大蔵経は1621年に開版されるジャン版であるが、これは後に版木がリタンに移されるためにリタン版とも呼ばれている。これらの大蔵経はカンギュルのみを持つものであった。

そして以上の諸版が前段階となって、上述したカンギュルとテンギュルの両方を具えた四大チベット大蔵経が17世紀末から18世紀前半にかけて開版されるに至るのである。因みに、上述の本学所蔵のナルタン版大蔵経は、カンギュルが1732年に

テンギュルが1742年に開版された。



チベット大蔵経の内容を、カタログ、実物共に一番参照が容易な北京版によって一覧するならば次の如くである。(数字は各テキストに付された番号を示す。)

-
- | | |
|---|------------------------------------|
| ↑ | 1. 秘密部 (rGyud) 1-729 |
| カ | 2. 般若部 (Sher phyin) 730-759 |
| ン | 3. 宝積部 (dKon brtsegs) 760 |
| ギ | 4. 華嚴部 (Phal chen) 761 |
| ユ | 5. 諸経部 (mDo sna tshogs) 762-1029 |
| ル | 6. 戒律部 ('Dul ba) 1030-1055 |
| ↓ | |
-
- | | |
|---|-------------------------------------|
| ↑ | 7. 讃頌部 (bsTod tshogs) 2001-2063 |
| | 8. 秘密疏部 (rGyud 'grel) 2064-5183 |
| | [9~22. 経疏 (mDo 'grel)] |
| | 9. 般若部 (Sher phyin) 5184-5223 |
| | 10. 中観部 (dBu ma) 5224-5480 |
| テ | 11. 諸経疏部 (mDo tshogs 'grel pa) |
| ン | 5481-5520 |
| ギ | 12. 唯識部 (Sems tsam) 5521-5586 |
| ユ | 13. 阿毘達磨部 (mNgon pa'i bstan bcos) |
| ル | 5587-5604 |

14. 律疏部 ('Dul ba'i 'grel pa)
5605-5649
15. 本生部 (sKyes rabs) 5650-5657
16. 書翰部 (sPring yig) 5658-5699
17. 因明部 (Tshad ma) 5700-5766
18. 声明部 (sGra rig pa) 5767-5794
19. 医方明部 (gSo ba rig pa) 5795-5801
20. 工巧明部 (bZo rig pa) 5802-5819
21. 修身部 (Thun mong ba lugs kyi
bstan bcos) 5820-5831
22. 雑部 (Ngo mtshar bstan bcos)
5832-5962
23. 目録部 (dKar chag)

カンギュルの最初の秘密部には密教経典が含まれている。続く般若部、宝積部、華嚴部は夫々般若経、宝積経、華嚴経を含み、次の諸経部はそれ以外の経典を含んでいる。戒律部は読んで字の如く律典から成る。テンギュルに移って、最初の讃頌部は讃仏文学である。秘密疏部は密教経典に対する注釈である。般若部はカンギュルのものと同じ名前を持つが、カンギュルのものはお経そのもの、テンギュルのものはその注釈であるという点が相違する。中観部には「空」の哲学を標榜する



中観学派の諸論書が、諸経疏部には諸経典に対する諸注釈が、唯識部には唯心論の哲学を論ずる唯識学派の諸論書が集められている。次の阿毘達磨部は範疇論的实在論の立場をとる阿毘達磨哲学の諸論書を、律疏部は律典に対する注釈を含んでいる。本生部は所謂ジャータカと呼ばれる仏陀の前世の物語（前生譚）を中心とする文学作品から成り、書翰部は手紙・教訓・金言の類を、因明部は論理学書を、声明部は文法学・言語学書を、医方明部は医学・薬学書を、工巧明部は工芸・技術・天文・暦数の類を、修身部は処世術・占い・政治術の書物を含んでいる。雑部にはごく僅かではあるが、インド論書の翻訳ではない、チベット人自身の著作が含まれており、目録部が全体を締め括っている。このように仏教の経典や論書が大部分を占めているが、仏典以外の医学書や天文学書も多く含まれ、仏教学者以外の研究者の出現が期待される所以である。

以上はチベット大蔵経について必要最小限の情報を列挙したに過ぎないが、さらに詳細に興味を持たれる方のために以下の二論文を参考として掲げておきたい。1) 拙稿「チベット語仏典概観」、『チベットの言語と文化』（冬樹社、1987）pp. 277-314；2) 今枝由郎「チベット大蔵経の編集と開版」、『岩波講座・東洋思想』第11巻、1989, pp. 325-350。チベット大蔵経の歴史・内容等について論じた書物・論文は国の内外を通じて夥しい数に上るが、それらのほとんどはこの二論文中に研究史を踏まえた上で網羅されている。

平成4年度展示会のお知らせ

来る12月1日(火)から7日間(予定)、附属図書館展示ホール(3F)において「翻訳に見る江戸期の学問」(仮称)をテーマとして標記展示会を開催します(一般公開・無料)。江戸期に翻訳され、刊本や写本として流通した辞書、解剖、舎密学等の資料と我が国で初めて『ロビンソン・クルーソー』を翻訳した黒田麴廬関係の資料を原書とともに展示します。
(情報サービス課)